癒しの天使とラブビート　1

浦賀狭霧

No.0　注意事項

この日記はフィクションである。登場する人物、事象、思想、名称は実在のものとは関係ない。

ここから先の文章は僕、浦賀カスミの事象記録、思想記録である。オチも伏線もなく、とても物語といえた代物ではない。それを了承の上でご堪能していただきたい。

No.1　あなたは人間ですか？

渡る世間は鬼ばかりというが、実際の世間は、鬼ほど優しいものではない。

鬼のほとんどは昔話で語られるように、悪役の代名詞である。しかし、敗北を認めて和解したり、人間と取引したりする道理の分かる鬼もいるし、友人のために涙を流す心優しき鬼もいる。

真に恐ろしいのは外道人間である。輩は物事の道理を理解しようともせず、他者を搾取することしか頭にない。人じゃないけど人間らしい生物と、人だけど人間らしくない生物の、どちらが良いかは語るまでもない。

僕の精神はそのような外道に荒らされた。肉体と精神が資本の人間にとって、精神の荒廃が何を意味するか。それは感情の死、幸福の枯渇、希望の消失。

もしも、健全な心のまま大人になれば、慈愛にあふれ、活力に満ち、己を研鑽し続けるような人間に成長していただろう。そして友人や恋人に恵まれ、素晴らしき人材となっていただろう。しかし、外道らの理不尽的所業の標的となった僕は、心の疲弊を繰り返し、精神の腐敗を味わっていた。

それでも幸せになることをやめたくなかった。大学生になればこの傷も癒える、そう信じていた。しかしそれは、青春という甘言蜜語に縋った自分の甘さを悔いる、という結果に終わった。

No.2　幸福を訪ねて三千里

大学入学後、心の自然治癒が不可能だと悟った僕は、自主的に自らを癒す方法を模索した。友人をつくる、恋をする、娯楽に浸る、運動をする、思いっきり休む、など。それで改善するという保証はないけど、信じたかった。人間は不安なことがあると、何かに縋りたくなる。「溺れる者は藁をもつかむ」という言葉にもあるように、幻やハリボテであっても希望を見たい、と人は思う。

No.3　出会うな危険

精神治癒作戦の一環で友達作りを試みた。しかし、僕のような小心者は、人に話しかけること自体が試練である。初対面に話しかける気概を持たぬ僕は、自らの人間的な器を研鑽することに専念した。器のある人間には自然と友人ができると信じていたからだ。こちらから近づけないのなら、向こうから近づいてもらおう。

具体的に何をするのか。それは日ごろの行いをよくすること。地域住民への挨拶、清掃活動、世間話などを行い、社交性のある人間のように振舞った。

同年代の友達の前に、まずはすでに知り合っている地域の人で器磨きを実践した。そして長年の行動の末、僕は目的のものを手に入れたと実感した。

すべてを魅了する魔性の雰囲気、あらゆるものを許し受け入れる底なしの器、それがあれば自然と素晴らしき友人や恋人が寄ってくると高を括っていた。しかし、その考えがそもそもの間違いだった。

寄って来たのは、大学構内で奇妙な噂を耳にする二人。後に紹介する「奇天烈変態紳士」と「煩悩纏いし無頼漢」であった。当時の僕は、その時点で友達づくり作戦は失敗だと思っていた。他人と親密になることを他力本願にした己の未熟さ、それを悔やむこともあった。しかし、作戦を成功に導いてくれたのは、彼らのおかげであることを、僕は後に知ることになる。

No.4　奇天烈変態紳士

信念に従った生き方に憧れていた。心の内から勇気が

湧き、信念が自らの幸せであると信じている。それが幸福なように見えたからだ。自分にとって何が大切で、何のために生きるか。それを自分の手で見つけられたら、僕も人生の意味を知ることができるのだろうか。

奇天烈変態紳士こと月居(つきおり)京助は、僕にそんな問題と向き合うきっかけをくれた男だ。彼は自らの美学を追求することに命を賭け、奇天烈前線を生み出し、道なき道を蹴散らしながら進む。

道端で突然笑いだし、花を見つけはかがんで長時間観察し、野鳥を見つけて後をつける、などの行動を繰り返している。彼が奇妙な噂となっているのも、このような不可思議な行動ゆえだろう。

そして、僕と出会った時の彼は、すでに構内の有名人であった。

No.5　煩悩纏いし無頼漢

煩悩纏いし無頼漢こと高萩夏彦は、僕の精神的支柱となってくれた男である。阿呆らしき事が、いかに素晴らしいかを教えてくれた。

不良のような風貌と、学ランのような上着を愛用しているので学生からは「番長」という名で呼ばれている。どことなく粗暴な印象だが心優しき男である。

そして煩悩にあふれている。マズローの欲求五段階説を下から上まで満たそうとし、常に何かを渇望している。除夜の鐘を聞こうものなら、煩悩と一緒に存在自体が消えかねない。そんな人間臭い男である。

No.6　自己紹介と序章の幕引き

遅ればせながら自己紹介をする。浦賀カスミ、大学一年生。名前から女性的な印象を受けるかもしれないが、男性である。他人より精神が脆弱であること、刺激に敏感であることが特徴。趣味は動画鑑賞、音楽鑑賞、読書。好きな食べ物は杏仁豆腐。以上。

個性的な二人と出会い、僕の学生生活は雑多な色にまみれることになった。そうして浦賀カスミ、月居京助、高萩夏彦という奇妙なグループが結成した。

なぜ我々が出会ってしまったか。それはなんとなく納得できる。

社会との迎合を嫌う月居京助、我が道を行きすぎるため協調性がほとんどない高萩夏彦、同調圧力への拒絶と精神の脆さが致命的な浦賀カスミ。周囲から浮いていたのだ。僕らは同じ匂いをしていた。うまく言葉にできないが、そんな感じがする。

ここまで、僕と二人の出会いについて記したが、ここから先は浦賀カスミの、ただの日記（事象・思想記録）である。冒頭でも説明した通り、オチも伏線もないが、ご笑覧ください。

No.7　さあ、バイバイキンの時間だぞ

時折、存在意義が分からないものに立ち会う。例えば、バームクーヘンやドーナツの穴。「穴がなければもっと食べられるのに」と子供のころは、誰しもがそう思っただろう。しかし、象徴ともいえる穴には、それぞれ意味がある。バームクーヘンの場合には、製造過程で芯となる部分が必要であるから。ドーナツの場合は諸説あるが、揚げる際に、生地に均等に熱が伝わるようにするため。

このように意義が分からないものでも、理由を知れば理解できるし、納得もする。しかし、僕は存在意義に納得できないものがある。それこそが、老若男女問わず、歯に苦痛を与える、あの虫歯とかいう現象である。

虫歯菌に問いたい。何のために生まれて、何のために生きるかを。子供に歯磨きの習慣を身に着けさせるために存在しているなら、多少の理解はできる。しかし、僕のような毎日丁寧に歯磨きしている人間を標的にするとは何事か。食べカスを残さず、表面がツルツルになるまで磨いているというのに。彼らは無慈悲にも繁殖し、他人の口内を縄張りにするのだ。何とも許しがたい。

そして歯の定期検査のたびに「ああ、虫歯できてますね」という言葉を聞く羽目になるのだ。

もしかしたら、虫歯は歯科業界を発展させるための、何者かの策略ではないかと思ったこともあったが、そんな愚説は僕自身が却下した。

人は何かを得たり失ったりすることに、理由を探したくなる。そして僕は口内の平穏を失ったために、虫歯に意味を見出そうとしていた。もしかしたら、存在すること自体に意味があるとは限らないのではないか。そう考えたら気が楽になった。

僕の虫歯も歯科業界の発展に貢献しているのだととらえるなら、多少納得できる。そうして僕は虫歯菌の存在の許容を果たした。

後日、歯の定期検査に向かう途中、虫歯菌に「言い残したことはないか」「すぐ楽にしてやる」などの慈しみの言葉をかけた。

No.8　単位危うし学べよ乙女

僕は大学入学当初、学問によって自らの見識を広げ、器を磨き、知的好奇心を満たすことを想像していた。

しかし、時を経るにつれて人は汚れる。悲しきかな、自らの好奇心を満たすための勉強が、いつの間にか単位のための勉強になっていた。そしてもうじきテスト期間である。テストの結果は単位取得に大きく関わる。テスト決行日が明らかになってから、僕は早めの対策を講じた。そして何とか復習を終えて、後は当日を待つだけとなった。僕はテストまで何も起こらないことを願った。しかし、あの彼がそうはさせなかった。

冬将軍が急襲した土曜日の朝、日本に住まう人たちは震えが止まらなかったという。そして、寒さに弱い僕は、暴れ狂う冬将軍に怒りを覚えていた。武者震いをしながら、僕は冬将軍の首を取るための装備を整えた。そんな日に高萩夏彦からメールで呼び出された。メールの内容は……

「冬将軍を討伐するための作戦を立てる。時間があったら家に来ないか？」

考えることは同じだった。といっても夏彦の場合、ふざけた内容で人を呼ぶときは寂しがっている合図である。僕はコートと手袋を装備して彼の家に向かった。
冬将軍よ、首を洗って待っているがいい。その綺麗な首を頂戴する。

夏彦の部屋に到着し、扉を開けるなり声が飛んできた。
「頼む。俺に点を取らせてほしい」
いきなり何を言い出すかと思えば、もうじき中間テストだというのに、対策をほとんどしていないというのだ。夏彦は震えていた。これは武者震いではなく恐怖で震えている。
気が付くと遠くから何かが聞こえる。外でゆったりとした足音が聞こえ、見慣れた姿が現れた。
「月居京助だ。失礼するぞ」
どうやら京助も呼んだらしい。京助は部屋に上がりこむなり、あたりを見渡した。
「ふむ、他人の部屋というのは面白いな。そして、もっと面白そうなものは……」
そして、ベッドを見つけるなり、その下に手を伸ばした。
「おいてめ、何やってんだよ！」
「いや、ベッドの下に小銭でも落ちてないかと思って」
「自販機の下じゃねえんだぞ！」
三人そろえば文殊の知恵というが、我々がそろったところで、事態は好転どころか難航しそうである。

「マジで来てくれてありがと！」
夏彦は泣きそうになりながら笑っていた。
「そこまで危険な状態なのか」
「多分な……」
夏彦は青ざめている。
「でも、来てくれるって信じてたぜ」
「私はあのふざけた内容のメールを、危うく無視するところだったぞ」
京助はあきれた様子だが、どこか楽しそうだ。

「でもまあ、来てしまったからには、私がしっかりと見てやる」

しかし、数時間経過した時点で、柿の種を食べながら映画を見るという、テスト前とは思えない惨状になっていた。こうなったのも柿の種とDVDを持ってきた夏彦が原因である。京助も「自分で呼んでおきながら」と反対したが、今ではテレビ画面に食いついている。

柿の種を食べながら夏彦がこんなことを言ってきた。

「鬼は外、福は内って言葉があるじゃんか。子供のころさ、あの言葉って人間の身勝手さのことを言ってるんだと思ってた」

柿の種のピーナッツを大豆と勘違いしたのか、いきなり節分の話題を振ってきた。京助は笑いながらフムフムとうなずいた。

「なるほど。不都合なものを遠ざけて、都合のいいものを優遇する。そんな排他的で身勝手な姿勢の風刺と捉えているわけか。なかなか面白い」

確かに考えてみると、そう解釈することもできる。

鬼を冷遇し、福を優遇するというのは、まるで分断統治である。被支配者同士に敵意を植え付け、黒幕である人間に攻撃の矛先が向かないようにする。結果、人間は両者を安全に支配できる。いったい誰がこんな所業を思いついたのか。

そんな馬鹿げた曲解は心の奥にしまっておこう……。というか僕は何しにここへ来たんだっけ。ふと外を見て僕は思わず声を上げた。

「おい夏彦、もう夕方だぞ！」

「やっべ！」

そして追い詰められた夏彦は、何とか一通りテスト範囲に手を付けることができたらしい。

目的は果たしたのでもう帰ってもいいのだが、月居京助が「まだ帰るには早い」と言った。

「君らは、この手の話に興味あるか」

京助は自分のカバンから紙袋を取り出して、我々の前

に置いた。
「なんだこれ？」
「ヒントは、大人の世界、紳士以外立ち入り禁止、禁じられし暖簾の最奥に眠る秘宝」
　夏彦は紙袋の中身を覗き込んだ。そして、ニヤニヤしながら僕を手招きした。なんとなく想像はついた。僕は紙袋の中身を見て、予想は的中したと確信した。
　そしてそれは、この紙面で語るにふさわしくないものと判断した。よって、ここから先の展開は、読者の想像に任せる。僕はこの章が規制されないうちに、速やかな幕引きをしなくてはならない。それでは皆様ごきげんよう。

No.9　禁断の扉

「禁じられた扉というのは、どうしてこうも魅惑的に映るのか。もし、禁じられたものに魅力などなければ、おじいさんが玉手箱を開けたり、鶴の機織（はたお）りを見たりすることもなかったはずである。それは、禁止されたことをやってしまいたくなる、カリギュラ効果のためかもしれない。
　犯罪という禁じられた扉の先にあるのは、刑罰であると我々は知っている。だから、ほとんどの人間が故意に白線を飛び越えようとしない。つまり、扉の向こうにあるものが不利益をもたらす存在だとわかっているなら開けようとはしない。
　開けようとするのは未知であるから。利益をもたらすものが先にあるとは限らないのに、我々はそこに魔力を感じてしまう。いわば、禁じられた扉を開くというのは賭けである。開けてみるまで分からないブラックボックス。つまり何が言いたいかといえば、これだから秘宝探しはやめられないのだ！」
　No.8はすでに幕を下ろしたはずなのに、月居京助が幕をこじ開けて変な事を言い始めた。夜も遅いというのに。
「君たちもどうだ！　新たな見識が広がるぞ」
　僕はもう月居京助の言葉が、子守歌に聞こえてきた。意識がもうろうとして、秘宝どころではない。この状況

は舟を漕ぐだったか、泥のように眠るだったか……とにかく眠い。もう言葉が出でこない。そして意識が泥船のように沈んだ。

パチパチというはじける音で目が覚めた。
「おはようさん、カスミ」
夏彦はすでに起きていた。可愛らしいエプロンを身に着けて、目玉焼きをつくっている。そして、僕の横で京助が眠っている。
「あいつ、昨日は好き勝手に喋ってくれちゃって。あとで寝顔を拝んでやる」
夏彦が呆れたようにつぶやいた。
「いい匂いがするな、夏彦」
「勉強見てくれた礼だ。目玉焼き丼をご馳走してやる」
しばらくして、月居京助が目覚めた。我々は食事の準備をして、三人で目玉焼き丼を囲んだ。どんぶりに盛られたご飯の上に、ハムと目玉焼きというシンプルな料理である。そこに醤油を垂らせば、腹の虫が鳴き始める。

「夏彦よ、ケッチャプはないか」
月居京助があくび混じりに言った。
「そっち派かよ」

食事を終えて満腹感の余韻に浸った後、それぞれの帰路をたどることになった。
「そんじゃ二人とも、また学校で」
「またね」
「さらばだ」
そして我々は別れた。目玉焼き丼の温もりがまだ体の中に残っている。冬将軍の猛攻はいまだ続いているが、温もりと満足感で寒さを忘れていた。
「首を頂戴するのはまだ待ってやる」と僕は冬の空に微笑んだ。